

● 推薦文
複雑なジェンダーのありように接近可能
— 復刻版によせて

成田龍一

戦後の日本において、「満洲」への関心は単純ではなかった。かつて、その地に暮らした人びとが懐旧の念を持つなか、冷静に傀儡国家をつくりあげた行為を見つめなおそうとする努力とのあいだで、「満洲」が論じられてきた。その後、一九九〇年代に、ポストコロニアリズムの方法が紹介されるなか、「満洲」に関わる議論はあらたな展開をみせる。一九九〇年代に入ってからだが、急速に関心が研ぎ澄まされ、歩調を合わせるように史料の発掘も進められていった。

そのなかで、満洲を舞台に展開された文学作品に関しては、いくつかのアンソロジーも編まれている。たとえば、黒川創が編集した「外地の日本語文学選」に「満洲・内蒙古 樺太」が収められ、コレクション「戦争×文学」のなかにも「満洲の光と影」の巻があらわれている。

このとき、「満洲」で発行された雑誌を見ることは、きわめて重要な営みとなる。作品掲載の媒体としてみならず、作品の背景がうかがわれ、さらには作品が書かれ、読まれた環境を知ることができる。すでにいくつかの雑誌が復刻されているなか、今回復刻される、『女性満洲』は、女性の文芸を正面から扱っており、なかでも重要な雑誌である。

一九四二年一月の創刊号には、関東庁の長官であった柳井義男が祝辞を寄せ、満洲婦人新聞社の社長・恩田明が「巻頭言」を記すのだが、『女性満洲』「敢て、有名、無名を問はず、女性文化の推進力たり得るならば誌上を開放する」とうたっている（「編輯後記」）。そして全号を通じて、女性作家の作品が並び、たとえば一卷三号（一九四二年三月）には、竹内てるよ、松田解子、平野婦美子らの名前をはじめ、多くの女性たちが名を連ねている。雑誌のタイトル通り、女性たちの活躍が目立つ。

（なりたりゆういち／日本女子大学人間社会学部教授）

● 推薦文
女性史のみならず、多くの領域にとつて、
高いポテンシャルを持つ史料

池川玲子

あの時代、「満洲娘」という日本語には二つの意味があった。ひとつが、チャイナドレス姿で銀幕から微笑みかけてきたり「わたしや十六 満洲娘」と口ずさまれたりした、イメージの中のフィクション的な異国の美少女。もうひとつは、満洲国に住むリアルな若い日本人女性の総称。

『女性満洲』のターゲットは後者である。出版地は大連。一九四二年一月、『満洲婦人新聞』を核に数種のメディアを統合して生まれ、『全満唯一の女性文化雑誌』を謳い文句に、敢戦開戦まで刊行された。高知県立文学館が、所蔵する十一冊を公開してきたこともあり、その存在自体は広く知られていた。とはいえ全貌は謎のまま。よって、これまで十分に活用されてきたとはいえない。今回、全体の八割超が復刻されるといふニュースに、心躍らせている研究者も多いはずだ。

「海に、空に死ぬことの出るの、家を守り、子を育てる日本の女あればこそ」という創刊号の巻頭言は、この小ぶりな女性誌が、太平洋戦争開戦を背景に、在満日本女性に統後を担わせるためのプロパガンダ・メディアとして出発したことを示している。ルイズ・ヤングのことばを借りるなら、帝国主義とは、本國と植民地のあいだに「クモの巣」状の関係を築くシステムである。「満洲の兄が日本の妹にあてた手紙」という形式ではじまる時局解説、日満双方に取材した開拓地記事、「内地」著名人からの叱咤激励のハガキ紹介、内外の書き手による次第に臨戦度を高

めていく小説や随筆……。本国の遂行する総力戦が、さまざまにネットワークを通じて植民地の統後化を促していくその具体的な様相を、そして二つの統後の隔たりと重なりを、私たちは、本誌を通じて確認していくことになるだろう。

とはいえ、ファッションやメイク情報、生花などの教養シリーズ、不自由になる物資事情を切り抜けるためのハウツーものといった、読者の歓心を引き出す記事も充実しており、そこが私のような女性史学者にとっての魅力となっている。『女性満洲』の誌面からは、これまでの研究で死角になってきた満洲都市部に住まう女性たちの姿が、近代的な消費者として、プロフェッショナルな職業人として立体的に立ち上がっているのだ。

それにしても、復刻なった三十三号分の書き手に、中国人名がほとんど見当たらないことには驚かされる。少ない例外の一人が、すでに日本人であることをカミングアウトしていた李香蘭で、東京から北京に向かう途中に乗り合わせた青年将校との邂逅を自慢げに記している（「残された蜜柑」巻八号）。紛い物の中国人「満洲娘」が、日本人「満洲娘」たちに伝える過剰な皇軍賛美。これもまた、日本から大陸へ、大陸から日本へと、双方向から編まれ続けた粘りつく糸の一本といえるだろう。

女性史のみならず、植民地研究、メディア史研究、カルチュラルスタディーズ等の多くの領域にとつて、高いポテンシャルを持つ史料である。

（いけがわれいこ）
大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員

『満洲の女性を語る』
満鉄旅客専務座談會

出 席 者 西村寛三氏 武田信之氏 大石政一郎氏 今野政雄氏 大野進氏 岩元精二氏 境清美氏 林正明氏 松岡増行氏

服装への注文
昭和十七年二月二十日於大連列車裏

踊と詩
石井 漢 古川 賢 一郎

詩の舞踏附け
この詩には歴史的な大きな動きがある。それは、詩が単なる文芸的表現から、社会批評や政治的メッセージを伝える手段へと変化したことである。この詩集は、その変遷を体現している。作者たちは、戦時体制下の社会状況を鋭く観察し、その矛盾や矛盾を詩を通じて表現している。これは、単なる娯楽を超えた、社会への介入と批判の姿勢を示している。

主要記事一覧

多様な座談会・インタビュー

青空の乙女たち（満洲航空エア・ガール座談会）
男性から見た満洲女性観——満洲の女性を語る（満鉄旅客専務座談会）
戦場大和撫子（山西戦線従軍看護婦座談会）

植民地文化関係——

最近の満洲音楽界に就て（音楽時評）
満映・俳優漫訪記
小田令嬢（読者文芸推薦小説）

生活・ファッション・美容関係——

満洲の洋装は何処へ行く（洋装時評）
ハルビン女装点描
昭和十九年の計画をたてる（決戦衣服）

ジェンダー——

李愛貞さんに訊く満系の結婚（探訪記）
満洲娘の結婚問題——戦時下女性の解剖
満洲女性は何処へ行く？——タンバ氏は空想する（東京通信）

※ファッションやメイク情報、料理、生花などの教養方面
戦時の長期化とともに深まる物資不足を切抜けるためのハウツーもの、
「満洲」の女性読者の歓心を巧みに引出す企画記事も多彩。

「空と女性」特輯

青空の乙女たち



＝満洲航空エア・ガール座談會＝

出 席 者	佐藤艶子さん
	後藤恵子さん
	伊藤喜多子さん
	池 見 知 子 さん
	清水千夏子さん
	八島寛一氏
	米原清氏
	都築三郎氏
	宮本英人氏
	新井中央飯店

撃滅詩集
敵國米英
撃つて滅せよ！
大東亞戦争究極の大詩文藝を！
期待されよ！
大東亞戦争究極の大詩文藝を！
六月月上旬発売

開拓地の
若妻座談會

記事案内

女性作家の作品・エッセイ関係——

晶瑩ふみ「白塔」
林紅子「香妃物語——支那は伝説の国」
松原一枝「贈物」
三宅豊子「鳥の巣で」
望月百合子／丸山海介（対談）「時局と「女大学」」
横田文子「明日への道」

満洲国を代表する中国人・ロシア人作家たちの寄稿も——

吳瑛「中国料理閑話」
バイコフ「白系露人の女性たち」

その他——

甘粕正彦「樋口一葉の日記」
李香蘭「残された蜜柑（手記）」

◎主要執筆者

- ①満洲文壇で活躍する作家たち。
大内隆雄／青木實／竹内正一／大内隆雄／工清定／秋原勝二／吉野治夫／北村謙次郎／日向伸夫／町原幸二／大谷健夫／藤山一雄／長谷川澄／緑川貢／北尾陽三／神戸悌……
- ②満洲国成立後、満洲文学運動の拠点は大連から満洲国（新京）に移った。しかし詩運動だけは大連が中心地で、「満洲詩人協会」も敗戦まで大連で活動をした。
城小碓／古川賢一郎／島崎曙海／川島豊敏／坂井艶司／岩本修蔵／杉山真澄／大野沢録郎……
- ③さらに日本内地からの寄稿も多数。
竹内てるよ／大谷藤子／網野菊／神近市子／板垣直子／平林たけ子／松田解子／小山いと子／深尾須磨子／大田洋子／林房雄／葉山嘉樹／佐藤惣之助／湯浅克衛／春山行夫／北園克衛／石井漢／徳永直／甲賀三郎／古谷綱武……